ススキの湯の起り

米代川の岸辺、今の大滝の低地から温泉が湧き出て湯の池をつくっていた。その池の中にひとむら(一群)のススキが長く大きくのびていたが、何年たっても同じ場所に生え、広がることもなければ絶えることもなかった。そこでムラ人はここをススキの湯と呼び、そこに薬師堂を建てた。

別の話では、むかし大滝の地に不思議な老人が現われて、卵の殻にお湯をつめススキの苞(つと)に包んで捨て去った。その苞を捨てた場所から温泉が湧きはじめたという。

後世の人は、この不思議な出来ごとを伝えるために、湯元に板を敷き土を盛ってススキを一株植える習慣となり、秋になるとススキはひときわ伸びて美しい穂花を見せ、湯治客や見物客でにぎわうようになり、ススキの湯あるいはタマゴの湯とよばれるようになったという。